

欧米におけるインドの宗教歌謡「キールタン」の受容と展開

—音楽、ヨーガ、スピリチュアリティ—

The Acceptance and Development of Indian Devotional Songs *kirtan* in the West:
Music, Yoga and Spirituality

小尾 淳

Abstract

Recently, audio and visual commodities related to Indian devotional songs known as *kirtan* (chanting the God's name) have been increased in the west. Similarly, one of the yoga styles called "*kirtan yoga*" has been gaining popularity. These movements are sometimes called as "*kirtan phenomenon*".

Previous studies show the outlines of the process of this phenomenon, however, some essential facts such as when "*kirtan yoga*" as we know it today was emerged, and who acted the key role in this movement, are not revealed yet.

Therefore, in this article I try to reconstruct the history of acceptance and development of *kirtan* in the West from religious and musical perspective.

I discuss the subject in three phases. Firstly, I examine some important events during the late 60'-70's, such as "The first yoga boom" and the rise of religious organization which emphasizes the importance of *kirtan*. Secondly, I examine events during the 80'-90's, which focus on the emergence of western-born *kirtan* artists and "audio yoga". "Audio yoga" is one of the form of fusion yoga appeared in this period. Thirdly, I examine events after 2000 such as the popularization of *kirtan* in music and yoga scenes.

In conclusion, I clarify that "audio yoga" emerged in the 90's became the predecessor of today's "*kirtan yoga*". And I point out some aspects and changes in the style of *kirtan* through the localization process in the west.

1 序論

本稿では、近年、北アメリカやイギリスをはじめとする欧米諸国で、インドの宗教歌謡「キールタン (*kirtan*)」が積極的に受容されている現象に着目し、現地の社会的背景と関連付けながらその受容と展開の過程を再構築する。

近年、特に 2000 年代以降、欧米各地のヨー

ガ・スタジオで「キールタン・ヨーガ」や「バクティ (信愛)・ヨーガ」と呼ばれる、インドのキールタン演奏を用いた瞑想法 / リラクゼーション法が人気を博していることが認められる¹⁾ [*Yoga Journal* 2000 (5-6): 88-93]。また、音楽の領域では 90 年代末以降「ワールド・ミュージック」や「スピリチュアル・

ミュージック」のサブジャンルとして「キールタン」や「チャンティング(Chanting、詠唱)」の名を冠した音楽商品が急増している。さらに、これらの商品を生み出した、プロ、アマチュアの「キールタン歌手」らによるイベントやコンサート情報が無数に見られる。これらの現象はしばしば、(欧米の)「キールタン運動」「キールタン革命」²⁾「キールタン現象」[Rosen 2008: 7]などと称されており、その実態が決して小規模なものではないことがうかがえる。

そもそも「キールタン」とはどのようなものか。名称はサンスクリット語の(*kirt*)から来ており、字義的には「唱える」という意味を持つ。ヒンドゥー教やシク教で重要な位置を占める宗教実践であり、インドでは一般的な宗教歌謡のジャンルの一つである。その基盤となる思想は10世紀頃成立したと言われる聖典『バーガヴァタ・プラーナ』に遡り、同聖典には「神の名号を繰り返し唱えることによってより大きな帰依の道に至る」という記述が見られる。

この思想は中世のインドで開花したバクティ(信愛)運動期に大衆に「実践」として広まったといわれる。その普及に貢献した人物として必ず言及されるのが、15世紀のベンガル地方で活躍した聖者チャイタニヤである。彼は「クリシュナ神」の名号を繰り返し唱えることにより、恍惚感に陥るといふ礼拝のスタイルを確立した[田中 2008: 198-200]。

バクティ運動がインドを流布したことにより、インドでは名称・実践形態も異なる多様なキールタン実践や芸能が生まれた³⁾。それに対し、欧米における演奏形態はほぼ一律に「コール・アンド・レスポンス(リーダーが歌詞を一節歌うごとに参加者が応唱する形

態)」のスタイルである。多くの場合、伴奏には鞆(ふいご)付きの鍵盤楽器ハルモニウムや両面太鼓のムリダング、カルタールと呼ばれる小型のシンバルなどが用いられる。

現代の欧米におけるキールタン実践の受容と展開を扱った研究は、アメリカの宗教社会学の分野における博士論文や修士論文に散見される程度でまだ多くはない。その中で、本稿に最も近い文脈としては、音楽研究者デルシアンポの論文『*Buying Spirituality: Commodity and Meaning in American Kirtan Music* (スピリチュアリティの購買—アメリカン・キールタン音楽における消費と意味—)』が挙げられる。デルシアンポは、欧米におけるキールタンの展開を概観した上で、その広告を事例としながら、音楽商品として流通しているキールタンに内包された「スピリチュアリティ」が消費の対象となっていること、その中には誤認もあることを指摘した。[Delciampo 2012]。しかし、いつ、今日の「キールタン・ヨーガ」が出現したのか、その仕掛け人は誰だったのかといった根本的なことが明らかにされていない。

次に、関連研究としては、欧米におけるキールタン受容の過程で重要な役割を果たした「クリシュナ意識国際協会(International Society for Krishna Consciousness)」(以下、ISKCON(イスコン))を対象とした宗教社会学的研究がある。同団体の過去40年間の活動の変化に焦点をあてた論文集『*Hare Krishna Movement: Forty Years of Chant and Change* (ハレー・クリシュナ運動—詠唱と変化の40年—)』では、信徒の世代交代や価値観の変化に伴い、路上でのキールタン実践を好まない信徒が増え、私邸や屋内での実践が主流になったことが指摘されている[Dwyer and Cole 2007]。ただ、同団体を対象とした研究

で音楽的側面が取り上げられることはわずかである上、外部の音楽的状況と結びつけて論じられることはほとんどない。

これらの研究に加え、井上貴子は『ビートルズと旅するインド、芸能と神秘の世界』の中で、欧米におけるサイケデリックの時代を背景としたインド音楽の影響を論じ、ジョージ・ハリスンとISKCONの関係を大きく取り上げている〔井上 2007〕。また、欧米でキールタン実践が増加したことの表れとして十数人の「西洋生まれのキールタン歌手」を取り上げたインタビュー集が2点出版されており、彼らがキールタンと出会ったきっかけや当時の様子、活動内容等を知ることができる〔Johnsen 2007; Rosen 2008〕。

これらの先行研究から、欧米でのキールタン受容と展開の大枠を類推することは可能であるが、宗教的側面と音楽的側面を包括的に検討する余地がある。したがって、本稿では以上の先行研究を参考にしつつ、これまであまり活用されてこなかったヨーガ関連雑誌や現在活躍中のキールタン歌手へのインタビュー集も資料として加え、欧米におけるキールタンの受容と展開の過程を再構築することを試みる。

本稿の構成は次の通りである。本章に続き次章では1960-70年代の出来事を取り上げ、対抗文化を背景としたISKCONの隆盛、関連した音楽的状況と「第一次ヨーガ・ブーム」について検討する。第三章では、1980-90年代を取り上げ、ISKCONの変化、キールタン歌手の活躍、「オーディオ・ヨーガ」の出現について論じる。第四章では2000年以降を取り上げ、「キールタン」のジャンルの確立、「キールタン・ヨーガ」の流行とそれに伴う問題、ISKCONのキールタンの変化について述べる。結論として、キールタンが「アメリ

カ化」する過程でもたらされた変化を指摘する。

2 第一の局面—1960-70年代

2-1 クリシュナ意識国際協会 (ISKCON) の設立

現代の欧米におけるキールタン受容の発端は60年代後半に欧米の若者の間で盛り上がりを見せた「対抗文化 (カウンター・カルチャー)」に見ることが出来る。東洋のホリスティックな価値観を重視する精神・身体修養実践が若者を中心に流行し、インドはこれらの若者たちの「聖地」となった。軌を一にして、インド人ヨーガ行者たちは欧米での活動を積極的に展開していった〔井上 2007: 80〕。

このような社会的状況を背景とし、本稿の文脈で重要な出来事は、1966年にインドの宗教者A.C. バクティヴェーダーンタ・スワミー・プラブパダ (本名: アバイ・チャラン・デー、1896-1977) (以下、バクティヴェーダーンタ) がニューヨークで布教活動を開始し、ISKCON本部を設立したことである (写真1)。彼は先述の聖者チャイタニヤの流れ (ガウディーヤ・ヴァイシュナヴァ派) を汲み、キールタン実践を信仰の支柱に据えて「クリシュナ」の名を一心に唱えることで輪廻の生存から脱することを説いた。

バクティヴェーダーンタの影響は多大なるもので、ヒッピーの若者たちが続々と入信した。当時、剃髪した頭に少量の髪を残し、サフラン色のローブやインドの腰巻を身に着けた西洋人の若者たちが、太鼓や小型のシンバルを打ち鳴らしながら路上で「ハレー・クリシュナ・・・」とマハー・マントラ (偉大なる真言) を唱える布教活動は「ハレー・クリシュナ運動」と呼ばれ、ニューヨーク、イー

スト・ビレッジの風物詩ともなった〔橋本他
2005: 384; 山下 2009: 193-194〕(写真2)(図1)。

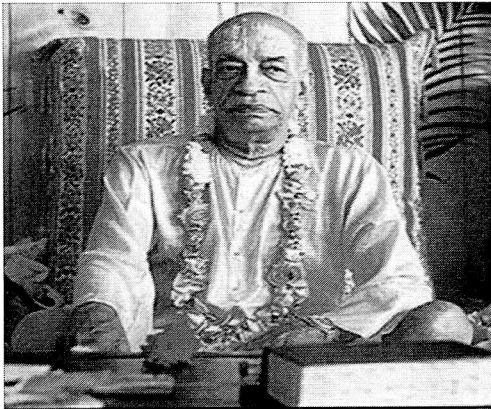


写真1 バクティヴェーダーンタ

出所: <http://iskcon.org>



写真2 ISKCON 信徒のキールタンの様子

出所: *Back to Godhead* Vol. 12 (1977年11月)

信徒らはバクティヴェーダーンタの指導の下、聖典を学び、様々な戒律を守り、菜食主義者として生活を送った。ISKCON 研究では、その中でも、寺院に住込み、世俗から離れフル・タイムで ISKCON の活動に奉仕する信徒を「コア」なメンバーと呼ぶ。77年にバクティヴェーダーンタが死去し、強力なカリスマ・リーダーを失った後も70年代の内はコアなメンバーが増加したという [Dwyer and Cole 2007: 58]。

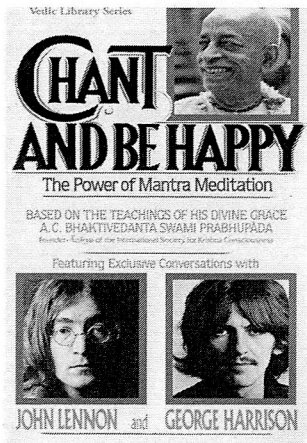
ハレー・クリシュナ ハレー・クリシュナ
クリシュナ クリシュナ ハレー ハレー
ハレー・ラーマ ハレー・ラーマ ラーマ
ラーマ ハレー ハレー*

図1 ISKCON の「マハー・マントラ」

*ハレー、クリシュナ、ラーマは全てヒンドゥー教のヴィシュヌ神を意味する言葉の呼格形である。

2-2 ビートルズの影響

70年代のISKCONの急伸にはビートルズのジョン・レノンとジョージ・ハリスンが一役買っている。後に、ISKCONによって出版されたジョージへのロング・インタビューを所収した冊子『*Chant and Be Happy* (唱えよ、そして幸あれ)』からも彼らが事実上、同団体の広告塔となっていたことが明らかである⁴⁾ [The Bhaktivedanta Book Trust 1985] (写真3)。特にジョージは1969年にロンドンでバクティヴェーダーンタに会って以来、ISKCONの活動を助け、同団体のレコードをプロデュースし、かなり肩入れしていたという [井上 2008: 65]。彼は1972年にロンドン郊外の広大な敷地と邸宅を寄付し、寺院とアーシュラムを開設した。そもそも、彼はインドの弦楽器シタールに関心をもっており、1966年7月に他のメンバーと共にツアーの帰路に初めてインドに立ち寄り、その後8月に改めて6週間ほど音楽修行のため渡印している。その際、師匠のラヴィ・シャンカールを通じて音楽のみならず、インドの精神世界に深く傾倒するようになったという [井上 2008: 57-60]。



(写真3) 『Chant and Be Happy』表紙

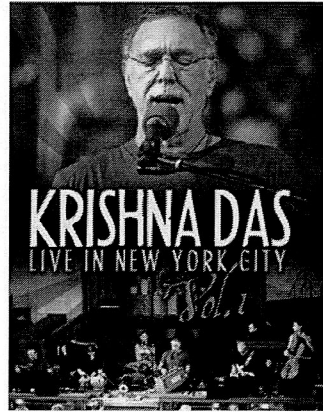
出所: [The Bhaktivedanta Book Trust 1985]

69年から71年にかけてリリースされたジョージのソロ・シングル「Hare Krishna Mantra (ハレー・クリシュナ・マントラ)」、*Govinda (ゴウヴィンダ)*、アルバム『*Radha Krishna Temple (ラーダー・クリシュナ・テンブル)*』の歌詞はいずれも ISKCON の信仰と深く関係する⁵⁾。こうして当時、「ハレー・クリシュナ」という言葉は ISKCON の通称となったばかりでなく、ヒッピーの合言葉となった [井上 2008: 65]。

2-3 「西洋生まれのキールタン歌手」の萌芽

ジョージの「ハレー・クリシュナ・マントラ」他に加え、この時期に西洋生まれのキールタン歌手数人がカセットテープをリリースしている [Johnsen and Jacobus 2007: 40; Rosen 2009: 313]。しかし、まだ歌手の数は限られており、一般のキールタンに対する関心も高いとは言い難かった。ここで、今日活躍している「西洋生まれのキールタン歌手」がどのような背景をもち、当時どのようにキールタンと出会ったかに言及しておきたい。例に挙げるのはクリシュナ・ダス (本名:

ジェフリー・カーゲル、1947-) である (写真4)。彼は今日、世界的にリスナーをもつ著名なキールタン歌手で、2012年のグラミー賞にノミネートされている⁶⁾。



(写真4) クリシュナ・ダス

出所: CD 『Krishna Das Live in New York』

クリシュナ・ダスとは「クリシュナ神の下僕」という意味で、渡印中に彼の師である聖者ニームカローリ・バーバー (?-1973) から授けられた。ニューヨーク市のユダヤ人家庭に生まれ育ち、カレッジに在籍中、ヒッピー仲間からインド帰りの神秘家リチャード・アルパート (後にラーム・ダスと改名) を紹介され、感化されたという。リチャードは当時のヒッピーたちのバイブル⁷⁾の一つともいえる『*Be Here Now (ビー・ヒア・ナウ)*』(1971年)の著者である。その後、クリシュナ・ダスは彼とアメリカ各地を放浪し、70年9月に渡印する。そこで先述の聖者ニームカローリ・バーバーに弟子入りし、キールタンを習得している。しかし彼は音楽家志望というわけでもなく、当時はキールタン歌手になるといった考えは全くなかったようである。自伝の中で、73年の師の死去が大きな出来事として人生に影響を与えたと語っているが、後

述するように、音楽活動を始めるのは90年代半ばになってからである [Das 2010]。

2-4 「第一次ヨーガ・ブーム」

以上のような、対抗文化を発端とする宗教的音楽的状況は、60-70年代の世界的な第一次ヨーガ・ブームとも連動している。ここでもビートルズは影の立役者として活躍する [山下 2009: 6]。彼らは超越的瞑想という独自のヨーガ瞑想法を広めるためにインド各地に瞑想センターを開いていたマハルシ・マヘーシュ・ヨーギー (1917?-2008) の教えに関心をもち、1968年に渡印する。それをメディアが追いかけて、そこでヨーガを「発見」したというのである [山下 2009: 6]。

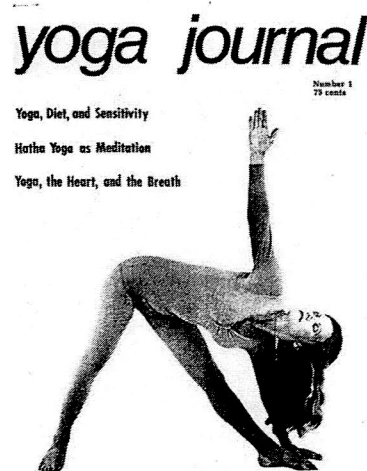
今日、ヨーガには様々な学派・流派があるが、当時は、およそ4-6世紀頃に成立したといわれる⁸⁾ 根本教典『ヨーガ・スートラ』に基づく「ラージャ・ヨーガ (ヨーガの王道)」または「古典ヨーガ」「瞑想ヨーガ」とも呼ばれるものが主流であった。その特徴は今日の体操的な動きを多分にもつ現代的ヨーガとは異なり、坐法を組んで純粋な瞑想を行うものである。同教典ではヨーガを8つに分けて説くことから、「アシュターンガ・ヨーガ (8部門から成るヨーガ)」とも呼ばれる。それらはすなわち禁戒、勸戒、坐法、調息、制感、凝念、静慮、三昧である [山下 2009: 110]。

しかし、次第に瞑想や調息のみならずより複雑なポーズをとり心身のバランスを整えるのに適した「ハタ・ヨーガ (力のヨーガ)」が広まっていく。このヨーガのスタイルは、16-17世紀頃著わされた『ハタ・ヨーガ・プラディーピカー (ハタ・ヨーガの灯明)』の教えに基づく。その第一章に「ひとえに人々をラージャ・ヨーガに導かんがためにハタ・ヨーガの教えを説く」 [佐保田 2014(1983):

172] とあるように、そもそも「ハタ・ヨーガ」は「ラージャ・ヨーガ」と切り離されたものではなく、その前段階に位置する道術である。

アメリカの雑誌『Yoga Journal (ヨガ・ジャーナル)』⁹⁾ 創刊号 (1975年) には「ヨーガ、ダイエット、そして感受性」「瞑想法としてのハタ・ヨーガ」、「ヨーガ、心、そして呼吸」といったフィットネスの要素を意識したテーマと精神的な部分を重視するテーマ両方が取り上げられており、当時がちょうど「精神性重視」から「身体重視」への移行期にあったことをうかがわせる (写真5)。

以上のような第一次ヨーガ・ブーム時には、まだヨーガの場でキールタンはほとんど行われていなかった。無論、インドにおいてはその限りではないし、『Yoga Journal』の広告欄においても「インド人」によるキールタンが紹介されている [Yoga Journal 1979(7-8): 43]。しかし、本稿で着目する西洋の「キールタン・ヨーガ」が出現するのは90年代半ばである。



(写真5) 『Yoga Journal』創刊号表紙
出所: [Yoga Journal 1975]

3 第二の局面—1980-90年代

3-1 ISKCON の変化

77年の開祖バクティヴェーダーンタ死後、ISKCON 内部では後継者争いや結婚等の理由から寺院の外部に居住する信徒が増加した。このような問題を鑑み、寺院に住み込み世俗から離れ奉仕することを勧めていた70年代とは異なり、80年代には家庭においてクリシュナ意識の修養が説かれるようになった [Dwyer and Cole 2007: 63]。それに伴い、家庭の事情等で定期的に寺院に来られない信徒らのために考案されたのが家庭を中心とする活動「Nama Hatta (ナーマ・ハタ)」である。これは字義的には「聖なる名の市場」という意味であるというが、つまりどこにおいてもクリシュナの名にアクセスできるプログラムである。このことは、寺院や路上といった特定の機会だけでなく、ISKCON のキールタンの場が一般の家庭に拡大したことによって、実践がより身近になったことを示唆している。

3-2 キールタン歌手の活躍

ここでは2-4に引き続きクリシュナ・ダスを例に当時の音楽的状況を確認していきたい。彼は80年代にレコード会社「Triloka Records (トリローカ・レコード)」を立ち上げ、一時はキールタンから離れワールド・ミュージックのプロデューサーとして活動していた。しかし、自分はキールタンを歌わなければならない、という思いにかられ、94年から毎週月曜日の夜にニューヨークの片隅でキールタン集會を始めた。たいていは10-15人が集まり、次第に注目されるようになったという [Das 2010: 202]。しかし、キールタンによって知名度を得るといふ欲望に罪

悪感を覚え、再びインドに旅立つ。そこでの神秘体験を経て「目覚めた」ことにより、自分の使命はキールタンを広めることであると確信できるようになったという [Das 2010: 209]。その後、彼は96年に初アルバム『*One Track Heart* (ワン・トラック・ハート)』でデビューし、98年リリースしたアルバム『*Pilgrim Heart* (ピルグリム・ハート)』は100,000枚を売り上げ、当時のニューエイジ・ジャンルでは注目すべき記録となった [Johnsen and Jacobus 2007: 15]。

3-3 第2次ヨーガ・ブームと「複合ヨーガ」

前節で述べた第一次ヨーガ・ブームがピークを過ぎたころ、80-90年代にはエアロビクスダンスが世界的に大流行し、ヨーガが一時存在感を失いかげ、忘れ去られるかにみえたという [山下 2009: 6]。しかし、この時期には次節で言及するような様々な「複合ヨーガ」が出現する。先に述べたように、体操的要素がふんだんに取り入れられた「ハタ・ヨーガ」が広まるにつれ、応用編としてフィットネス効果のある、現代的なヨーガが生み出され定着していった。例えば、アイアンガー・ヨーガ、ホット・ヨーガ (ビクラム・ヨーガ)、パワー・ヨーガなどが挙げられる。それらの多くはハタ・ヨーガを下地としている。これらがハリウッド女優をはじめとするセレブに取り入れられると、再びヨーガが注目されるようになった。ヨーガの思想を研究した山下は、現代のヨーガ・ブームは、「こころ」すなわち精神的な部分が強調されたきらいのある第一次ブームとは大いに様相を異にし、「からだ」の側面に大きく偏ったヨーガが全盛を極めたと指摘している [山下 2009: 7]。

3-4 オーディオ・ヨーガ・クラスの出現

しかし、90年代になると、再び「精神性」に目を向けるヨーガが注目されていく様子が認められる。例えば、92年5-6月および94年1-2月版の『ヨガ・ジャーナル』[*Yoga Journal* 1992(5-6) Issue 107; 1994(1-2) Issue 114]ではヒーリング音楽が大きく取り上げられている。また、同誌94年7-8月版に初めて「キールタン」の名称が記事に見られ、ワールド・ミュージック音楽家であり現在キールタン歌手として活躍しているジェイ・ユータル (1951-) の音楽に焦点が当てられており、その頃からヨーガの場において、チャンティングやキールタンに対する関心が徐々に高まっていたことが推測される。

その後、96年以降、同誌の広告欄に「オーディオ・ヨーガ・クラス」なるものが出現する [*Yoga Journal* 1997(7-8): 64]。これはニューヨークに本部をもつ「ジヴァムクティ・ヨーガ・センター」の広告で、「初心者クラス」「中級・上級クラス」それぞれの項目に「バガヴァーン・ダスによる音楽、34の坐法、マントラのサウンドが練習に新たな側面を加えます・・・」「クリシュナ・ダスによる音楽、30の坐法を確実に楽しく・・・」といったコピーがついている¹⁰⁾ (写真6)。

(写真6)「オーディオ・ヨーガ・クラス」の広告

出所: [*Yoga Journal* 1997(7-8): 64]

「ジヴァムクティ・ヨーガ」は84年にダンサーであり音楽家のシャロン・ギャノン (1951-) を中心に立ち上げられた現代の複合ヨーガの一つである。メソッドは「ハタ・ヨーガ」を下地としながらも、「バクティ」や「ナーダ (音)」の概念を取り入れて瞑想を行う、すなわち「精神」の側面を強調したものとなっている。「ナーダ」とはサンスクリット語で「音」を意味するが、それは耳で聴き取れる音のみならず、自らの内なる音をも指す [Hersey 2014: 18]¹¹⁾。その概念は紀元前1200年頃¹²⁾に成立した聖典『リグ・ヴェーダ』に遡るとされ、先述の『ハタ・ヨーガ・プラディーピカー』には「真にヨーガの三昧を欲する者は一点の音にのみ焦点を合わせ、その他全ての思考を取り払うべし (筆者訳)」とある [Hersey 2014: 17]。無論、これは音楽を聴きながらヨーガを行う「オーディオ・ヨーガ」とは全く異なるレベルの話であるが、根本聖典からその概念を引用し現代のヨーガと融合させたことで、「真正性」を創り出すことに成功したといえる。

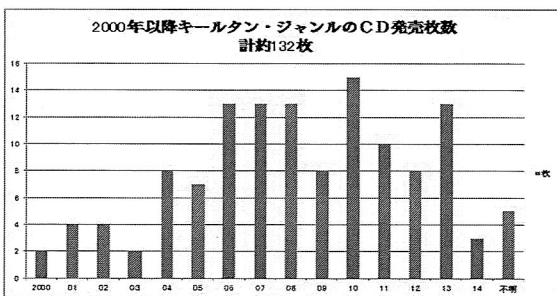
これらの概念に則った、現代の「オーディオ・ヨーガ」とはいかなるものなのだろうか。創立者のシャロン・ギャノンは、「他のヨーガ・スタジオと異なり、本スタジオでは音楽を聴きながら坐法は行わない。聴くことに集中することによってより (ヨーガへの) 理解が深まるのだ」といった趣旨のことを述べている。クリシュナ・ダス自身はヨーガの専門家ではないため、彼のキールタンを聴いて瞑想し、その後他のヨーガ講師が坐法を教えるという形式のクラスなのであろう。これが今日の欧米において人気を博している「キールタン・ヨーガ」の原型であると考えられる。

4 第三の局面—2000年代以降

4-1 キールタン・ジャンルの確立

クリシュナ・ダスを始めとする「西洋生まれのキールタン歌手」らが90年代後半から知名度を確立し、キールタンは飛躍的に関心層を増やしていった。以下の表を見るように、2000年代には「キールタン」の名を冠したCDが急増している(表1)。その中でも、クリシュナ・ダスの2005年リリースしたアルバム『*Om Namah Shivaya*』は250,000枚のヒットとなった。また、先述のジェイ・ユータルは2002年にグラミー賞にノミネートされている。

「キールタン」と一言と言っても、音楽的な幅は限りがない。フォーク、ロック、ジャズ、レゲエ等はもちろんのこと、あらゆるジャンルで演奏が可能である。また、楽器に関しても非常に柔軟である。ハルモニウムに次いでギターやベースを用いている歌手も多い。また、ソロ演奏からバック・コーラスやオーケストラを編成して演奏する者までスタイルは様々である。



(表1) 2000年以降のキールタン・ジャンルのCD発売枚数

出所: アマゾンを基に筆者調べ (2014年6月現在)

4-2 「キールタン・ヨーガ」の流行

このような音楽面でのヒットと連動して、90年代後半には急速にキールタンがヨーガの場で流行する。『*ヨガ・ジャーナル*』2000年5-6月版には「古いものは再度新しいものとなる。チャンティング(キールタン)はアメリカ中のヨーガ・スタジオの人気者だ」というコピーが見られる。西洋の「キールタン・ヨーガ」はどのように行われ、受講者は「新しい」キールタンをどのように受け止めたのだろうか。

この記事ではクリシュナ・ダスの演奏が取り上げられている。スタジオには40人ほどの生徒がいる。彼が、師ニームカローリ・バーバーについて少し話したあと、静寂があり「シュリー・ラーム ジェイ・ラーム ジェイ・ジェイ・ラーム(ラーム神に勝利あれ)」と唱え始めると、生徒達が若干ためらいがちに「シュリー・ラーム ジェイ・ラーム ジェイ・ジェイ・ラーム」と応唱する。何度かの「コール・アンド・レスポンス」の後、北インドの打楽器タブラが伴奏に参加し始める。最初の30分は皆静かに座って応唱していたが、次第に皆立ち上がり、踊り、足踏みを始め、自由に身体を動かす様子が述べられている。一つのキールタンに30分ほどかけた後、静寂があり、再び短い話の後、次のキールタンが行われるというパターンが数時間にわたって繰り返された [*Yoga Journal* 2000 (5-6): 88-93]。

このようなクラスが人気を呼び、98年以前にはキールタンを全く導入していなかったスタジオでもキールタン奏者を招いて演奏したり、また、少なくともクラスの最初に数分のキールタンを導入するようになったという [*Yoga Journal* 2000 (5-6): 93]。なぜこのようにヨーガの場でキールタンが受容されたのだ

ろうか。その理由としては、単にヨーガを受講するという受け身の姿勢ではなく、「参加型」のアプローチによって得られる「一体感」や「連帯感」が大きいといえるだろう。共に歌い、呼吸し、参加することによってグループは共鳴し、お互いを高め合う [Johnsen and Jacobus 2007: 10] 効果があるという。コンサートであれヨーガ・スタジオであれ、リーダーに続いて「神の名」を応唱するキールタンでは、単なる音楽鑑賞とは異なる精神的なつながりが生まれると考えられる。

4-3 「キールタン・リーダー」の需要

ヨーガの場であれ、ISKCON であれ、キールタンを長時間にわたって実践するには音楽的な素養のみならず、しばしば聴衆に説法を行う知識や人々を惹きつけるカリスマ性などが必要となってくる。キールタンを先導する者は「キールタン・リーダー」と呼ばれる。キールタンは基本的に短句の詠唱であり、リーダーに続けば誰にでも歌うことができる。その容易さが参加者を拡大してきた反面、リーダーを養成するにはそれなりの時間がかかる。今日、開講されている「キールタン・リーダー養成講座」の受講期間を見ると、集中講座でも数か月かかるようである。様々なキールタンを習得するだけでなく、ヴェーダやヨーガの聖典を学び、ハルモニウム等の楽器を用いて伴奏できるようにするためである。また、プロのキールタン奏者から1週間ほど泊りがけで学ぶ「キールタン・キャンプ」も開講されている。

しかし、このような状況は新たな問題を生み出した。2009年の『ヨガ・ジャーナル』では「チャンティング無しでヨーガを教える」という記事が見られる。つまり、2000年代を通してキールタンがヨーガ・スタジオを席

巻したために、元々それを好まない講師がキールタン導入にあたって困惑しているというのである¹³⁾。これは当然の帰結であって、フィットネス重視の現代的ヨーガの講師に突然、歌を歌い、「バクティ」の概念を説くよう求めるのは無理がある。そもそも世界的に「ハタ・ヨーガ」が流行したのは体操的な動きが多く、フィットネスに効果がある点に注目が集まったからである。無論、聖典『ハタ・ヨーガ・プラディーピカー』には多分に精神的修養が説かれているが、「キールタン・ヨーガ」の流行によってその部分が後回しにされてきたことが浮き彫りとなったといえよう。

4-4 ISKCON のキールタンの変化—世代間の相違から

本節では、キールタン・ヨーガの流行がISKCON に与えた影響に言及する。設立から約50年が経過し、同団体では既に第三世代が活躍している。筆者が調査を行ったカナダのISKCONバンクーバーおよび、公に活動しているISKCON出身若手「アーティスト」を事例に、同団体キールタンのスタイルの変化について検討してみたい。

筆者は2014年8月に約2週間にわたって同寺院のキールタンを観察した他、第一世代の信徒へインタビューを行った。ここでは毎週火曜日に「若者のキールタン」と題した集会が行われている。また、8月17日に開催された「クリシュナ生誕祭」で、第一世代(およそ60代-70代)と若い世代(10-20代)の信徒の演奏をそれぞれ聴くことができた。キールタンはいずれも「マハー・マントラ」である。

その結果、明らかに第一世代のキールタンに比べ若い世代のキールタンには、音楽ジャンルと旋律の多様化が見られた。すなわち、

前者はゆったりとした旋律に乗せて、ステップを踏みながら統一された動きでキールタンを行う(写真6)。その様子から、明らかに全員が歌いながら旋律に則って歌っていることがわかる。対して若い世代のキールタンはリーダーとなった者がしばしば旋律を「創作」するため、時に参加者がついていけない場面も見られた。例えば、あるインド系の20代前半の信徒は明らかにインド古典音楽の旋法を用いた技術で、また、10代後半の信徒はロック調の激しい調子で演奏しており、他の参加者との音楽性の共有に欠けている様子が認められた。



(写真6) ISKCON 第一世代のキールタンの様子

出所：バンクーバー-ISKCONにて筆者撮影(2014年8月18日)

この音楽性の相違について60-70年代に入信した第一世代に尋ねたところ、当時は旋律を「創作」しようという考えを持つ者はほとんどいなかったという答えが返ってきた。ISKCONでは「マハー・マントラ」以外にも複数の曲が実践されるが、それらはバクティヴェーダーンタ直伝の旋律を踏襲しているものが多い。しかし、80年代後半頃からその状況は変わってきたという。例えば、様々な音楽活動を経てISKCONに入信したアインドラ・ダス(本名:エドワード・フランクリン・ストライカー、1953-2010)は1986年からクリシュナ信仰の聖地ヴリンダーヴァンにおい

て行われる「24時間キールタン」のリーダーを務め、優れた音楽性で各地の信徒に多大な影響を与えた¹⁴⁾。さらに90年代後半以降、その様子はインターネットを通じて各地の信徒に広く知られるようになり、特にキールタンの動画を頻繁にチェックする10代-20代の信徒の中に自由に旋律を創作する者が増えたというのである。今日では、旋律の複雑さや音楽性のギャップに第一世代がついていけないこともあるという¹⁵⁾。

現在、若手の信徒を中心に絶大な支持を受けているのが2010年にデビューしたキールタン・バンド「ザ・マーヤープリズ」である(写真7)。「マーヤープリズ」はデリー西部に位置する町で、チャイタニヤの生誕地と考えられており、ISKCON本部が設置されている場所でもある。ザ・マーヤープリズは米国内外でライブを行い、CDをリリースするなど活発に活動している。「キールタン狂想曲」と題された公式ホームページに見るように、彼らにはこれまでのキールタン実践の枠組みを超えようという意識が見られる。四名のメンバーの内、男性三名はカルタール、ムリダング、時にフルートやハルモニウムを担当するほか、ダイナミックなジャンプやステップを取り入れたアクロバティックなパフォーマンスが人気を博している。唯一の女性メンバーはバック・コーラスとインド古典舞踊バラタナーティヤムをベースにした踊りを担当する。彼らのパフォーマンスは確かな技術に裏付けられており、男性メンバーはいずれもアメリカとインドでISKCONの教育を受けると共に、インド古典音楽の知識も学んでいる。また、女性メンバーはインドの総合芸術学校「カラークシェートラ」で5年間舞踊を学んだ経歴をもつ¹⁶⁾。



(写真7) ザ・マーヤープリズ

出所: <http://www.mantralogy.com/>

先行研究では、ISKCONのキールタンは「過去」の重要な出来事として語られることはあっても、今日の現象の中では看過される傾向にあったといえる。確かに、同団体は世界に勢力を拡大しながらも、情報の発信先は信徒に向けられており、いわば「内向き」であったように思われる。同団体は「定番」のキールタン実践を確立したが、新しい試みを外部に発信する姿勢には欠けていた。このことはISKCONも認めるところであるらしく、ザ・マーヤープリズのデビューを報じたニュースでは、同団体は「キールタンのブレイクに乗り遅れた」と述べている¹⁷⁾。したがって、上記に述べたISKCONのキールタンの変化は、自然発生的というよりも、キールタンの商業化やキールタン・ヨーガの流行といった外部からの影響を少なからず受けていると見てよいだろう。

5 結論

結論として、欧米におけるキールタンの受容と展開をまとめる。

欧米におけるキールタン現象は、60-70年

代に隆盛した対抗文化を契機に、インドのスピリチュアリティに目覚めた若者たちを主体として始まった。彼らは社会からの逸脱を試み、独自の表現方法として、また使命としてキールタンを数十年間にわたって実践し続け「西洋生まれのキールタン歌手」の地位を確立した。

80年代に「身体」の側面に偏っていたヨーガの場では「精神性」を再び省みる時期に来ており、また多様な複合ヨーガが生まれていった。

90年代末の「ナーダ」や「バクティ」の概念を取り入れた「オーディオ・ヨーガ」の出現は、目新しいものとしてだけでなく根本聖典にも則るものとして歓迎された。

2000年代、ヨーガの場でのキールタン需要の加速と並行してクリシュナ・ダスを始めとする歌手らが次々に登場し、その音楽面は多様化し成熟し、幅広い関心層を取り込むことに成功した。音楽とヨーガをこれまでになく固く結びつけることに貢献した。

他方、ISKCONは約半世紀にわたって「マハー・マントラ」を中心としたキールタンを一貫して実践し続け、独自の安定した発展を遂げてきた。しかし、その内部では世代交代や信徒らの価値観の変化への対応が求められ、家庭でのキールタンや複雑な旋律を伴うキールタンが生み出された。

以上のことから欧米におけるキールタン現象では次のことが指摘できるだろう。

第一に、二つのキールタン実践の潮流が形成されたことである。一つ目は、ヨーガの場を基盤として90年代末から急増した非宗派主義のキールタン実践である。ここではあらゆる聖なる名前、あるいは様々な「真言(マントラ)」が唱えられる。二つ目は、「ガウディーヤ・ヴァイシュナヴァ派」の流れを汲

み、「クリシュナ神」の名を唱えることを重んじる ISKCON のキールタン実践である。今日のキールタン現象はこの2つの潮流が相互に影響しあってきた結果である。初期のISKCON のハレー・クリシュナ運動のインパクトによってビートルズのメンバーがキールタンに目を向けるようになり、一気に世に知られることとなった。また、クリシュナ・ダスを始めとするアーティストらが急速な市場獲得があったからこそ、それに刺激を受けたISKCON が新しいキールタン・スタイルを打ち出したのである。

第二に、実践者の拡大である。キールタン現象の立役者の多くは「西洋生まれ」である。先天的にインドと関係のない人々がキールタンと出会い、一からその技術と精神性を獲得しようと試みた。また、グローバル市場をもつヨーガと音楽産業の流れに乗ることによって関心層が飛躍的に増え、素人からプロまで実践者の層に厚みが増した。

第三に、商業化である。キールタンの音源化はインドでも普通に見られることであるが、その影響は地域内にとどまりがちである。しかし、欧米のキールタン現象では国際的なレベルで聴衆を獲得するまでに至った。商業ベースに乗り、市場を獲得したからこそ急伸を遂げることができたのである。その好機は三回訪れた。一回目は、69-71年のジョージ・ハリソンのアルバムリリースである。二回目は、90年代末からのヨーガ市場にキールタンが包摂され急速に需要が増えた時期である。三回目は、2000年代にキールタン・ジャンルが確立した時期である。

第四に、音楽ジャンルの多様化である。キールタンは基本的に宗教歌謡であるが、いかなる音楽ジャンルにも柔軟に対応できたことによって、多様な奏者を生み出し、幅広い聴衆

を獲得できたといえる。

第五に、第二とも関係するが、実践の場の拡大である。親和性の高い場所としてヨーガ・スタジオが挙げられるが、今日ではキリスト教会、コンサート会場、野外フェスティバルなど、場を問わず行われる。ISKCON では路上や寺院で行っていた実践が80年代から一般家庭でも行われるようになった。結果として様々なレベルにおいて人々がキールタンにふれる機会が増えたのである。

以上、本稿ではキールタンにまつわる音楽、ヨーガ、スピリチュアリティにまつわる出来事を包括的に検討し欧米における「キールタン現象」の全体像を把握することを試みた。今後は、事例調査に基づき今日のキールタン実践における二つの潮流の関係を詳細に検討することを課題としたい。

付記

本稿は国立民族博物館共同研究「グローバル化の中で変容する南アジア芸能の人類学的研究」(平成24-27年)で行った発表に基づいて執筆したものである。

注

- 1) 「バクティ」とはヒンドゥー教の概念で神に熱烈な愛を捧げる信仰形態である。
- 2) オンライン版『*Yoga Journal*』
2011. 12. 16付 (2014年11月1日閲覧)
- 3) 例えば、南インドでは「キールタン」よりも「バジャナ (讃歌)」の名称で親しまれている。19世紀末に多様な楽曲形式の演奏を伴う祭礼体系が確立され、20世紀半ばに宗教芸能「バジャナ・サンブラダーヤ (讃歌の伝統)」の名称が流通するようになった。
- 4) 本書中でジョージは、『ハレー・クリシュ

- ナ・マントラ』を唱える以上の幸せはない」と述べている。
- 5) 後にジョージはこれらの一連の貢献について「全ては神聖な奉仕の一部」「マントラを世界中に広めるための試み」と述べている。
- [The Bhaktivedanta Book Trust 1985: 14].
- 6) クリシュナ・ダス公式ホームページ <http://www.krishnadasmusic.com/live-ananda.htm> から (2014年11月1日閲覧)。
- 7) 『*New York Times*』2010年1月18日付。
- 8) 成立時期には諸説あるが、ここでは[山下2009]に従った。
- 9) ここでは本来の読み方に近い『ヨーガ・ジャーナル』とせず、同誌の日本版タイトル『ヨガ・ジャーナル』に合わせた。
- 10) [*Yoga Journal* 1997(7-8): 64] から。
- 11) 『ヨーガ根本聖典』で佐保田は、ナーダ音とは「カラダの内部から聞こえてくるかそけく美妙的な音のこと」とであると述べている[佐保田2014(1983): 201]。
- 12) [Hersey 2014] では成立を紀元3世紀半としているが、本稿では『ヒンドゥー教を知る事典』に従った。
- 13) オンライン版『*Yoga Journal*』
2009年6月9日付。
<http://www.yogajournal.com/article/teach/teaching-yoga-without-chanting/>
(2014年11月1日閲覧)
- 14) <http://www.mantralogy.com/sri-aindra-prabhu/> (2014年10月25日閲覧)。
- 15) 2014年8月20日バンクーバー ISKCONにてバーヴァ・ダーサへ行ったインタビューから。
- 16) <http://www.indoamerican-news.com/?p=2451> (2014年10月20日閲覧)。

- 17) <http://iskconnews.org/the-mayapuris-beat-the-drum-for-kirtan,1936/>
(2014年10月20日閲覧)。

参考文献 (日本語)

- 伊藤雅之 2011 「現代ヨーガの系譜—スピリチュアリティ文化との融合に着目して—」『*宗教研究*』第84巻4輯, pp. 417-418.
- 井上 貴子 2007 『ビートルズと旅するインド、芸能と神秘の世界』 柘植書房新社。
- 佐世保鶴治 2014 (1983) 『ヨーガ根本聖典』 平河出版社。
- 島菌 進 2012 『現代宗教とスピリチュアリティ』 弘文堂。
- 田中 多佳子 2008 『ヒンドゥー教徒の宗教歌謡—神と人との連鎖構造—』 世界思想社。
- 永嶋 弥生 2011 『「鍛える私」から「癒される私」—現代ヨーガに関する文化史的研究—』 早稲田大学大学院提出修士論文。
- 西尾秀生・瀧口明生 2008 『宗教と実践—ダールマとヨーガによる解脱への道』 ナカニシヤ出版。
- 橋本泰元・宮本久義・山下博司 2005 『ヒンドゥー教の事典』 東京堂出版。
- 藤本 龍 2009 『アメリカの公共宗教—多元社会における精神性』 NTT 出版。
- 山下 博司 2009 『ヨーガの思想』 講談社選書メチエ。
- ラムダス (著) 吉福伸逸 (訳) 1987 『ビー・ヒア・ナウ—心の扉をひらく本』 平河出版社。

参考文献 (英語)

- Das, Krishna. 2010 *Chants of a Lifetime: Searching for a Heart of Gold*. Hay House Publishers.
- Delciampo, Matthew J. 2012 *Buying Spirituality: Commodity and Meaning in American Kirtan*

Music, A Thesis submitted to the College of Music
in partial fulfillment of the requirements for the
degree of Master of Music.

Dwyer, Graham and Richard J. Cole.

2007 *Hare Krishna Movement: Forty Years of
Chant and Change*, London/ New York:

I. B. Tauris & Co Ltd.

Gelberg, Steven J., (ed) 1983

*Hare Krishna Hare Krishna: Five Distinguished
Scholars on the Krishna Movement in the West*,
Grove Press.

Hersey, Baird. 2014 *The Practice of Nada Yoga:*

The Meditation on the Inner Sacred Sound,
Inner Traditions Rochester.

Hunt, Stephen J. 2003 *Alternative Religions:*

A Sociological Introduction,
Ashgate Publishing Company.

Johnsen, Linda and Maggie Jacobus 2007

Kirtan! Chanting as a Spiritual Path,
Yes International Publishers.

Rosen, Steven. 2008 *The Yoga of Kirtan:*

Conversation on the Sacred Art of Chanting,
FOLK Books.

The Bhaktivedanata Book Trust. 1982

*Chant and Be Happy: The Power of Mantra
Meditation*, The Bhaktivedanata Book Trust.

(雑誌、オンラインマガジン)

Yoga Journal 1975-2014 California Yoga Teachers
Association.

Back to Godhead (URL) <http://btg.krishna.com/>